

カルシユの足跡を追って

◇12◇

若松 秀俊

フリッツ・カルシユ博士はドイツ・ザクセン王国の首都であったドレスデン郊外のブラゼヴィッツで、手広く食肉品を扱つて、ヘルマン・カルシユの長男として、一八九三年に生まれた。ブラゼヴィッツ・シラープラッツにあるフリッツの生家は、その一部が、現在は小さなレストランとなつてゐる。

母はルイーゼ・クニス。二人の姉がいたが、長女のエリザベートは幼少時に亡くなつた。すぐ上の姉が、後にオーストリア

出身のドイツ人と結婚したフリーデルである。国のお首都であったドレスデン郊外のブラゼヴィッツで、手広く食肉品を扱つて、ヘルマン・カルシユの長男として、一八九三年に生まれた。ブラゼヴィッツ・シラープラッツにあるフリッツの生家は、その一部が、現在は小さなレストランとなつてゐる。

母はルイーゼ・クニス。二人の姉がいたが、長女のエリザベートは幼少時に亡くなつた。すぐ上の姉が、後にオーストリア

生い立ち (上)

裕福な家庭に生まれ育つ

フリッツは四歳になるころ、エルベ河で危うくおぼれ死にそうになつた。そのとき、どこの誰ともわからない旅人が助けてくれたのだった。その情景が彼の脳裏には

フリッツは四歳になるころ、エルベ河で危うくおぼれ死にそうになつた。そのとき、どこの誰ともわからない旅人が助けてくれたのだった。その情景が彼の脳裏には

後には何度も長女のメヒテキ、裕福になった家庭でルフトに語つたという。生まれ育つたフリッツにドイツでは数学が小さいほど良い成績で、日本音楽を聴いたときの感動の五段階評価とは異なり、女の子どもとやりとり



フリッツ自筆の若き日の思い出ノート

は約二十人で、父親の職業が記録されている。工場主などの実業家、大学教授、医師、弁護士、兼ねたノートが残っている。そのノートのページに挟まったままの古い絵葉書が見つかった。父の成績はあまり芳しくない。これは「落第」だ、とマルブルクの自由ザアルドルフ学校で教師をしていた二女のフリーデは、成績表を見て笑いながら語っていた。日本の通信箋・通信簿に相当するが、父親ヘルマンの確認のサインが見られる。フリッツの残したノートの内容の大部分は、若き日の思い出である。内容はまだつぶさに調査していないが、おそらくそのすべてが第一次世界大戦前に書いたものである。十四、五歳までの、

や自分の心の動きを控えめに綴っている。彼の心根を知る有力な手がかりとなる記録である。この書に残っている十枚ほどの写真には、一応解説が付いているが、誰の写真か、何のためなのか現在のところ分からない。

フリッツの母のルイーゼは、自分たちの大きな家が人手に渡ってから、アパート暮らしであった。一九三二年に、三歳のメヒテルトは独り暮らしの祖母ルイーゼと、この地で面会している。このくだりについては、彼女が初めて見るドイツの街や祖母の印象とともに拙著『湖畔の夕映え』に載せているので、こちらを併せ読んでいただきたい。

(東京医科歯科大学大学院教授)